C 50　女子学生の食生活に関する規範意識と独自性欲求との関連性

加納　三千子（福山女短大）

1．目的：食生活には古くからさまざまな社会的規範があり、それが食事マナーや言伝え、伝統食として現代の生活に伝わってきている。これらの食生活規範に対する同調の程度は、個々人の緒特性に依存することが考えられる。そこで、本報ではその点を明らかにするため、食生活規範に対する意識を、その規範に対する態度（私的見解）と食生活規範に対する世間の評価を想定した主観的規範（社会的評価）の二側面から測定し、①食生活規範に対する重要性の認知、②食生活規範の種類による重要性認知の特徴、③食生活規範に対する態度と主観的規範のずれ得点の大きさと独自性欲求との関連性を検討した。

2．方法：食生活規範に対する態度と主観的規範の測定は、一般的な食事マナー、和食、洋食、中国料理、食べ物の言伝え、伝統料理に関する32項目について行った。独自性欲求はSynderらの尺度のうち、内的一貫性の高い28項目を用いて行った。調査はF短大の学生201名を対象として1989年12月上旬、教室において実施した。このうち分析に供することのできた有効票は191名（95.0％）であった。

3．結果：①食生活の各規範項目は「非常に大切」から「どちらかといえば大切でない」まで、項目によってかなり大きく異なった評定がなされ、食生活に関する規範を、きびしく認知されている規範から比較的緩やかに認知されている規範まで順序づけることができた。②規範の種類別にみると、女子学生は全般的なマナーを重要視し、言伝えを最も軽視していた。③食生活規範に対する主観的規範と態度の差と独自性欲求との関連性を分析した結果、独自性欲求の強い者ほど主観的規範と態度の差が大きいことがわかった。